

## 偽りの教え

2:8 あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意なさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。

2:16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。2:17 これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。2:18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、2:19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。2:20 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、2:21 「すぎるな。味わうな。さわるな」というような定めに縛られるのですか。2:22 そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。2:23 そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。

皆さんは「私は誰でしょうクイズ」をしたことがありますか？私がある人物についていくつか話すので、その内容からそれが誰であるかを推測してください。さあ、始めましょう。「私は若い頃、夢の解き明かしを始めました。家族と国を死から救うことが私の宿命でした。私は兄弟や上司の妻に裏切られ、牢獄で忘れ去られた者となりました。ついに牢から出た私は、この国の責任者に任命されました。私は誰でしょう。」旧約聖書に登場するイスラエルの子、ヨセフのことだと思ったら、正解です。もう一度やってみますか？「私は特別な星の下に生まれました。正式な教育はあまり受けていませんが、成長するにつれて、私はその霊的な洞察力で知られるようになりました。私は若くして説教をし始めました。私は、ミニストリーの確証ともなったしるしを起す能力を授かりました。私は人の悪いところを見抜くことができました。また、人々がどんな罪を犯したかを知る能力も持っていました。今も私には世界中に信者がいます。私は誰でしょう？」これは難しいですね。想像がつかますか？ウィリアム・ブランナム、と言った人は、正解です。ブランナムは、信者たちから「神の声」と呼ばれています。彼のミニストリーは、1940年代から50年代にかけて、その風変わりな教義の数々と、彼が神のために語ったという主張を中心に成長していきました。

偽りの教えとまことの教えの違いは、どちらが信じられそうかというような単純なものではありません。皆さんにとって先述の二人の話のどちらが信じられそうかは分かり

ませんが、どちらも現代の私たちの耳には奇妙に聞こえる要素があります。私たちは、物質的あるいは具体的な方法で考えることに慣れきっているのです。聖書に出てくる人たちは騙されやすいような人たちではありませんでした。少なくとも現代の私たちよりも。彼らは神を知ろうとしていましたし、私たちもそうです。彼らは自分の人生に意味を見いだそうとしていました。私たちもそうです。コロサイ2章8節と16-23節で、使徒パウロは偽りの教えが台頭することに対して教会に警告しています。パウロの警告はいくつかの層を成していますが、パウロの言っていることを要約するべく、律法主義とシンクレティズム（混合主義）という「レンズ」を通して見ていくことができるでしょう。この2つの用語は聖句には出てきませんが、私たちにとって十分馴染みがあるので、パウロが教会に警告したことについて、考えをまとめていくのに役立ちます。律法主義とは、具体的で実用的なことを信仰の実践の中心に据えようとする宗教的傾向のことです。神とその働きに重点を置くのではなく、特定の事柄に忠実であることに重点を置きます。例えば、厳しい食習慣に従うこと、祈りの長さ、週に何回断食をするかなど、数え上げればきりがありません。このような傾向は、クリスチャンに限ったことではありません。これは罪深い人間の本質の一部で、すべての宗教に律法主義があります。律法主義は神と関わる人間に重点を置いているので、それ自体が誤りであることを証明しています。別の言い方をすれば、人間が、神が応答すべき方法を形成しているのです。もし神のために何かをすれば、神は何かをしてくださる、という風に。

一方、シンクレティズムとは、ある考え方と別の考え方を混合し、相反する考え方を調和させようとするものです。これは今日の話題にあてはまることです。私たちの心の中には、生活のある領域で慣れ親しんだ考え方や習慣を、イエスへの信仰と混合させようとする誘惑があるからです。私たちは、その危険性を知ることができないか、あるいは、危険を知るだけの賢明さを持っていないかのどちらかです。今日の聖句を見ていく前に、ある事実に注目してもらいたいと思います。それは、パウロの警告には励ましも含まれていることです。パウロは、もし彼らがキリストのうちにいるならば、すでに罪の赦しと新しいいのちを受け取っていると述べ、さらに、キリストにおいて、神は私たちを支配しようとするすべての力を打ち破られたと言っています。今日一緒に警告について考えていきますが、希望を失わないでください。自分の努力を強調したり、自分の過去の考え方や新しい信仰を融合させたりすることは、身近な誘惑です。イエスの時代にはよくある問題でした。モーセと出エジプトの時代にさかのぼってもそうです。それは恐らく、私たちが自分にとって最も心地よい方法で神と関わろうとするからでしょう。23節には、「そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」とあります。私たちは皆、神を喜ばせたい、神を理解したいと願っています。しかし、律法主義やシンクレティズムにおける努力は、私たちの道を曇らせるだけです。

### **むなしいだましごとの哲学によってとりこになる(8節)**

8節で、パウロは教会に存在する脅威を紹介しています。そして、「2:8 あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものでは

ありません。」とあります。この命令は単純そうにも聞こえます。「このような考えにとられるな」です。けれども、これに対して毅然と立ち向かうことは、どれほど簡単と言えるでしょう。この説教を聞いている人それぞれに、自然と誘惑や心の弱さがあります。自分が魅力を感じないものもあるものですが、私が言いたいのは、他の人がどうして偽りの教えに引き込まれるのかわからなくても、次は自分がそうな可能性があるから注意しなければならない、ということです。

パウロは、むなしいだましごとの哲学に捕らわれてはならないと言っています。この言葉を読んで、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。私も含め、多くの方は哲学を理解するのは難しいと感じます。哲学書を読むこともほとんどありません。ですから、本を読んだり、哲学の講義を受けたりして、新しい哲学を取り入れようとするのは少ないと思います。では、私たちにはむなしいだましごとの哲学の影響は無いのでしょうか？私はそうは思いません。パウロは、2つの具体的な領域で、哲学の虜になることについて言及しています。まず、「人の言い伝えによるもので」とあり、次に「この世の幼稚な教え」と言っています。ここでも、私たちにとってより身近な表現、律法主義とシンクレティズムという表現を使うことができますが、この種のことがコロサイの文脈でどのように適用されていたかに注意する必要があります。初代教会時代の他の多くの教会と同様に、コロサイ教会にもユダヤ人と非ユダヤ人クリスチャンが存在していたと思われます。当時、ユダヤ人の伝統には、神の律法を破らないための厳格な追加ルールを守ることを重視するものがありました。一方、異邦人のキリスト教徒は異教の背景を持ち、全く別の哲学を持っていました。宗教的慣習を継続するか、新しいものを教会に溶け込ませるか、教会内のユダヤ人と異邦人の対立に左右されたことでしょうか。日本の教会は、この区分がある意味逆転しています。ずっと持ち続けたい誘惑に駆られそうな古い宗教的慣習は、クリスチャン生活とはほとんど関係がなく、しばしば伝統とみなされます。一方で、私たちの周りには、キリスト教の教えを仏教や神道の教えに適合させようとするような、他の宗教の影響がたくさんあります。過去に多くの方がこれを試みました。このようなことをどう考えたらよいのでしょうか。ここで律法主義とシンクレティズムという分け方が参考になります。8節にある「人の言い伝え」の要素は、私たちが神の前で何かをしなければならないという、常に存在する要求を指し示しています。行いをすることです。8節の「この世の幼稚な教え」の要素は、私たちがより深い真理を理解するために、何か新しい教えや新しい考えを見いだそうとする誘惑があることを思い起こさせてくれます。これらはいずれも、その目的から外れています。それは、それらが私たちをキリストに導くことができないからです。「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」（コロサイ 2:9）

### 人の言い伝えを守らないことで誰にもあなたを批評させてはなりません（16-17節）

9-15節でパウロは、自分たちのためにキリストが働いてくださったことを改めて思い起こさせ、教会を励ましました。ですから、16節で偽りの教えの話に戻ったとき、この手紙の読者は、キリストの御業との比較を目前にしているのです。「2:16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。2:17 これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。」16節の「批評させる」という表現は、

私が今回、律法主義という言葉を用いたきっかけの部分でもあります。そこには、神の前で人間の行いを高めたいという思いだけでなく、自分たちが進んでやっていることを同じ様にしている周りの人たちを見下したいという思いがあるのです。パウロが教会に勧めたのは、ユダヤ人の慣習のうち、こうした特定のことを優先しないことで、人に裁かれられないようにすることです。例えば、カーシェールの食べもの（ユダヤ教の食のタブーを避けるもの）を食べるべきというルールは廃止されました。いまや、ユダヤ人クリスチャンと、ユダヤ人クリスチャンが多い環境で生活する異邦人クリスチャンの良心の問題となったのです。同じことが、ユダヤ教の祭り、新月祭、安息日の伝統についても言えます。ここで強調したいのは、これらのこと自体が悪いということではなく、それらがクリスチャンの良心を縛ることはないということです。実際、ユダヤ人の良心も縛るものではなかったはずなのですが、「人の言い伝え」の影響は強いものでした。なぜ、これらのことによって束縛されなくなったかということ、旧約聖書の命令も、来たるべきメシア、私たちの主イエスを指し示すために存在したからです。私たちは、神が旧約聖書の中でイスラエル人に与えた、神が共にいてくださるという約束を、キリストにおいて受け取ったのです。忠実なクリスチャンであるために、ユダヤ人の習慣に従わなければならないという義務感を持つべきではありません。同様に、キリスト教の伝統に与えられる重みもこの程度だと言うことができます。クリスチャンがお酒を飲むことは罪を犯すことだ、とルールのように言うのは、キリスト教の伝統の一部ではありますが、聖書にあることではありません。時間の都合上、ここでは割愛しますが、他にもクリスチャンが神と関わりやすくするために、物事を優先事項としたり、他人を見下したりする例があります。ここで忘れてはならないのは、私たちはキリストの中にいるので、こうした人間の伝統は私たちを拘束するものではない、ということです。神への愛と隣人への愛という神の律法が、私たちの導き手です。私たちの良心は、人間の裁きを恐れることによってではなく、私たちの主キリスト・イエスの力強い犠牲によって縛られています。自分が何か貢献しているつもりになるために、なぜ、このような偉大な救いから遠ざかることがあるのでしょうか。

### 福音を妥協することによってほうびをだまし取られてはいけません(18-19 節)

16 節にあった良心の縛りと並行して、18-19 節では、「ほうびをだましとられる（不適合とされる）ことのないように」警告が書かれています。

「2:18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、2:19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。」

18 節を見ると、パウロが特定の人物や偽りの教えを念頭に置いているような印象を受けます。「(自身の)肉の思いによっていたずらに誇り」とあります。もし、パウロが特定の人物や偽りの教えを念頭に置いているとしたら、それが何であるかは十分に理解できません。紀元 1 世紀には、「物理的な世界は悪であり、霊的なものだけが善である」とする偽りの教えがたくさん流布していました。パウロは禁欲主義や天使崇拜について言及しています。禁欲主義とは、世への依存をなくすために、食べ物や快適な生活を厳

しく制限することです。この考え方は、私たちの多くが知っているでしょう。天使崇拜は、今日ではあまり一般的ではありませんが、その誘惑を容易に理解することができると思います。御使いは神の臨在に最も近い存在です。御使いは神の栄光を映し出す存在です。御使いには私たちのような肉体がありません。また、幻は神からの直接のメッセージですから、その魅力はよくわかると思います。御使いが神に近い存在であると同時に、より深い真理にアクセスできる印象を与えることばかりです。これらの問題は、それが「愚か者の金」であることです。見た目が素晴らしく、それらしく聞こえても、結局は何の価値もありません。キリストに重点を置くことをやめ、自分の経験に重点を置いているのです。このような考え方で真理を見定めようとするのが、私たちの感じ方です。私たちは、もし何かを真実だと感じたら、それを真実として扱います。これはまさにシンクレティズムと呼ばれるもので、キリスト教の教えと他の宗教的実践を混ぜ合わせて、より深い真理を発見し、キリスト教信仰をノンクリスチャンに受け入れやすくしようとするものです。しかし、キリストの中に、私たちが必要とするすべての希望と愛と力を見出すことができます。結局のところ、キリストの中に神ご自身を見るのです。もし私たちが神のことをキリスト以外のところに求めるなら、私たちは時間を無駄にしています。不適合とされることへの警告に注意してください。「ほうびをだまし取られてはなりません。」私たちは少なくとも2つの方法でそうなる可能性があります。私たちの生活様式と信仰告白によってです。もし私たちが罪深い欲望に浸っているなら、それは私たち自身を不適合にします。同様に、もし聖書の教えに反する信念を持っているなら、私たちは不適合です。教会で教えたり、人を指導したりする資格はないでしょう。イエス以外のものに依存することを受け入れたり、他の人々に教えることは、危険であり、不適合となるようなことです。特に、幻や神からのメッセージ、聖書以外の情報源から見いだされた新しい考え方など、新しい教えを受け入れることには、極めて慎重であるべきなのです。

### キリストにあって、必要がすべて満たされる(20-23 節)

使徒パウロは 20-23 節で自らこのように言っています。

「2:20 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、2:21 「すぎるな。味わうな。さわるな」というような定めにとられるのですか。2:22 そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。2:23 そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」

ここで何かおかしいことが起こっていますね。パウロが言っていることを理解するために使ってきた区分が見当たりません。律法主義とシンクレティズムの境界線が曖昧になったのです。「すぎるな。味わうな。さわるな」という命令は、どちら側をも指している可能性があります。20 節は幼稚な教えについて言及することから始まり、22 節ではこれらの規制は滅びるものを指している、と言っています。これらは、自由に使えるように与えられた単なる地上のものということです。これは、シンクレティズムというよりも、はるかに律法主義に近いものです。

どうなっているのでしょうか。その答えはとても簡単だと思います。両極端のように見える2つのものがあるとき、その2つは、実は哲学的にかなり近いものなのです。実は、律法主義もシンクレティズムも、どちらも保証を与え、もっと人間に神の存在を訴えようとする試みなのです。どちらも、聖書に書かれていない方法で霊性を高めようとする努力に私たちを引き込みます。一方は個性と罪について言い訳をしようとし、他方は過ぎ去った時代の文化的要素を模倣させようとし、パウロの要点は、現代にしても過去にしてもその文化を模倣しようとするなら、それは的外れであるということです。イエスが私たちの目標であり、目標に到達するための手段でもあります。イエスは、私たちが必要とするすべてなのです。イエスが私たちに必要なすべてであると言うのは簡単ですが、それを受け入れるのは全く別のことです。イエスが私たちの必要なすべてであるとはどういうことなのか、立ち止まって考えてみる必要があります。23節で、パウロは肉の欲望を止めることに言及しています。律法主義やシンクレティズムは、自己流の宗教を促進することはできても、肉の欲望を止めることには向いていないと言っています。もちろん、パウロはその逆が真実であると言っているのです。キリスト・イエスを信じ、信仰によって歩むことこそが私たちを助けてくれます。私たちの人生がキリスト・イエスという土台の上に築かれるとき、イエスが私たちのかしらであるときに私たちの人生はイエスのご性質を中心に形作られ始めるのです。イエスのご性質を悪く言う人は、この世にほとんどいません。自己犠牲、困っている人への愛、自制は主が模範とされています。キリストを知らせたい、イエスを主として従うよう人々に呼びかけたいというクリスチャンの願いは、人々が不快に思うことです。イエスの大使となりましょう。神の御言葉に従順に忠実に生きることです。私たちは世に対して死にました。もはや世に支配されることはありません。私たちの命はキリストの中に隠されています。神の愛から私たちを引き離すものは何もありません。信仰によって主イエスを受け入れましょう。バプテスマの水で洗われましょう。神の御霊にあって歩みましょう。